

開 会 挨 拶

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター・副センター長
伊藤 貢

第6回湖岸生態系保全・修復研究会の開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、大変お忙しい中、ご参加いただきまして厚くお礼申し上げます。

昨今、テレビ等の報道をみていますと、自然災害による被害が大きな話題となっております。ミャンマーを襲った大型サイクロン、中国の四川大地震、岩手・宮城内陸地震、さらには、フィリピンでの台風6号などで多くの尊い命が失われたという報道を目の当たりにして、心が痛むとともに、自然の力の前には如何に人間の力、命ははかないかということ、「私たち人間は自然の危うさの中に生かされている」ということを改めて認識させられる思いです。

また、一方で、私たちの人間活動が、地域の環境はもちろんのこと、気候変動など地球規模の大きなサイクルにも影響を及ぼすことも明らかになってきております。

私たちの生活と自然の環境の関わり、つきあい方について、このままでいいのだろうかと改めて考えさせられるとともに、具体的に何か行動しないといけないとの強い警鐘がならされているのではないかと考えさせられる、昨今の状況であります。

さて、本日の研究会は、昨年度から琵琶湖環境科学研究センターの重要な政策課題研究として、「湖岸生態系保全・修復に関する研究」を進めており、その一環として開催させていただいているものであり、今回で六回目を迎えます。

かつて、私たちの生活を支えるため、その時々必要性から、湖岸域の生態系は破壊されてきました。しかしながら、様々な調査・研究が進められる中で、琵琶湖の環境を保全する上で湖岸域の生物相、生態系は大変重要な役割を果たしているとの認識から、平成4年に湖辺の生態系を代表するヨシ群落の保全のため、「滋賀県ヨシ群落保全条例」

が制定されるなど、滋賀県独自の取り組みが進められてきました。

しかしながら、いったん壊した生態系を再生することは極めて難しく、昨今の琵琶湖を取り巻く環境は、さらに大変厳しい状況にあります。

すなわち、生物多様性の急激な低下が明らかになってきており、琵琶湖の南湖での水草の大量繁茂、在来魚介類の著しい減少、外来生物の蔓延など、その対策が求められる喫緊の課題となっております。

現在、滋賀県では、第一期の琵琶湖の総合保全計画「マザーレイク21」が2010年度に終了することから、新たな課題解決のため第二期計画で、琵琶湖の保全施策の再構築を目指し、検討が進められております。その重要な柱として、湖岸の生態系の保全・修復が位置づけられております。

湖岸の生態系をどう保全し、どのように修復するのか。あるいは、琵琶湖、内湖、流域で私たちの生活とのつながりをどう再生するかを議論されているところです。

県におきまして、かつて干拓された早崎内湖を再生しようとする取り組みが進められており、その自然再生の方策や暮らしとの関わりでの再生も大きな課題となっております。

本日は「里湖としての内湖再生を考える」をテーマに5名の先生方からご講演を頂くことになっております。

最近、里湖という言葉聞くようになってきていますが、まさに滋賀県の取り組みもうとしている方策に、生かせるのではないかと大変注目され、期待しています。

本日、先進的な研究成果、取り組みを紹介いただき、その後の意見交換の場を通じ、湖岸域の保全・修復・再生について活発な議論、ご示唆を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。